

コース報告

コース責任者

C 1	
I 担当講師名	
石川素子（コースヘッド）・小野純	
II 学生のうちわけ	
学生数 12 名（男性 5 名・女性 7 名）（内ロータリー奨学金生 4 名）	
国籍 アメリカ 8 名（含：エジプト系 1・台湾系 1）、 英国 1 名、アイルランド 1 名、スコットランド 1 名、韓国 1 名。	
III 教材（書名、扱った課の番号など）	
主教材	『Japanese for College Students, Basic Vol.1』
副教材	『げんき』（抜粋） 『ようこそ』（抜粋） 『Situational Functional Japanese』（抜粋） 『Japanese for Busy People』（抜粋） 『絵とタスクで学ぶ日本語』（抜粋） 『Basic Kanji 500』（抜粋） 『みんなの日本語・初級』（抜粋）
視聴覚教材	『ヤンさんと日本の人々』 『Japanese for College Students, Basic Vol.1』の音声 CD
IV コースの目標	
<p>言語習得の基本である 4 技能の入門レベルを学習し、その習得を目標とした。</p> <p>読む：ひらがな、カタカナ、漢字で書かれた簡単な読み物が読める。</p> <p>書く：ひらがな、カタカナ、漢字を使って、400～800 字の作文が書ける。</p> <p>聞く：基本的な日常表現の聞き取りができる。</p> <p>話す：日常生活における基本的な会話ができ、それを使って生活できる。</p> <p>又、言語習得に不可欠な文化面への理解も深められるよう、その機会を設定した。</p>	
V 評価の基準	
クラス参加（出席、ハンドアウト、宿題）	10%
作文	5%
クイズ	10%
ユニットテスト	20%
オーラルテスト	20%
プロジェクト	5%
スキット発表	10%
期末テスト	20%
VI 授業の構成（1 週間／1 課のうちわけ）	
<p>主要教科書に従って、一週間に 2 課の割合で授業を進め、知識面と実践面の両立で予定を組んだ。例えば、教科書で紹介した文法事項については、そのルールの説明と運用練習でその理解を促した。更に理解した文法項目の実践レベルでの定着を目標として、多くのビジュアル教材やアクションを使用することにより、その定着に努めた。</p> <p>又、各課毎に宿題を通じて学習させたクイズをほぼ毎日行い、語彙力や漢字力や動詞・形容詞の活用力</p>	

<p>の強化に当てた。</p> <p>2課に一回ユニットテストと口頭テストを計4回行い、最後の2課は筆記と口頭テストとともに期末に組み込んだ。</p>	
VII 授業の内容	
① 聞き	<p>特に聴解だけに焦点を当てた時間は取らなかったが、授業内での学習言語の使用でその聴解力の向上に当てた。その結果、ユニット試験に出される聴解問題にも対応できる能力が身についたと思われる。更にビジターセッションや、チューターや、校外学習等、教室以外の日本語にも接する機会を与え、その成果を狙った。</p>
② 話し	<p>授業内では学習言語を極力使用し、学習者が自ずと自然に学習言語による発話ができるような環境作りに努力した。又、その言語での思考も自然に出来るよう関連性のある内容を多く取り入れ、ヴィジュアル教材を使用する等して、その訓練を繰返した。その結果学習者の学習意欲を促進させることができ、同時に学習者がリラックスしてクラス活動に参加できた。</p> <p>又、ロールプレイも発話を促す重要な練習とし、ふんだんに織り込んだ。与えられた環境の中で自身の考えを相手に伝える練習の積み重ねは文法の習熟度の確認が出来ただけでなく、コース後半に用意されたロールプレイ発表会とスキット発表会に反映された。</p>
③ 読み	<p>漢字学習の後、教科書の読みのセクションや関連教材を読ませ、読解力の向上に努めた。</p>
④ 書き	<p>漢字：各課で紹介される漢字はフラッシュカードで読みを紹介、書き順、複合語などの練習をし、宿題による自習の後、漢字クイズによって、その習熟度を判断した。</p> <p>作文：作文ノートを用意し、適宜思ったことなどを書いて提出するよう指導した。学習者によりその頻度は様々だったが、最終的には目標とするレベルに近い内容の作文の達成が見られた。最後の『文集』では、600-1000字程度の長さで、伝えたい内容を持った作文が書けるようになった。</p> <p>ワープロ：使い方を練習させ、作文も書けるようになった。</p>
VIII 校外学習 (プロジェクト)	
	7月29日(金)
行 き 先	武蔵境周辺散策
活動内容	<p>4人1グループで次のタスクを課した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 交番に行って、郵便局の場所を聞く。 2. 郵便局に行って、ICUまでの郵便料金を聞き、切手を買って、予め書いておいた先生宛の絵葉書に切手を貼って、投函する。 3. 文房具屋に行って、所定の買い物をしてくる。買わせた文房具は『半紙』、『お祝用祝儀袋』、『ご霊前用祝儀袋』。 4. 武蔵境北口周辺の商店街の地図を作る。
IX 総括 (良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等)	
<p>クラス構成はロータリー奨学金生4人、9月以降ICUで勉学を続ける学生1人、残り7人は純粋に日本語を勉強したくて、コースに参加した学生であった。ロータリーの何人かを含むほとんどの学生達は全体的に学習意欲が非常に高く、活気もあり、コースのアカデミックなアプローチに初めの頃は満足であったように見受けられた。</p> <p>しかしながら、コースが始まってすぐに、基本条件であるひらがなとカタカナの学習をしてきていない学生がおり、初めの一週間はそれに時間を費やさねばならず、思い通りのスタートを切れなかった。ひらがなとカタカナの学習をしてきていなかったロータリーの学生によると、事前情報には基本条件とコース</p>	

のアカデミック性が明確にされていなかったとの事であった。短期集中特有の授業スピードの中で 初めの遅れはなかなか取り戻しがたく、一週目の終わりにはロータリーの学生が一人、辞めたいと言い出したが、3週目復帰を目標に2週目はクラスに出席しないというICU側の措置がとられた。

ロータリーの学生に限らず、夏しかICUにいないという学生も多かったため、3週目を過ぎ、文法事項も複雑になってきた頃にはコースがあまりに集中的であるため、その進度等に疑問を抱く学生、疲れを露わに授業中に示す学生、体調を崩す学生、朝遅刻してくる学生等が続出、クラス運営がだんだん難しくなってくるのを感じた。

そんな中で、教師側も学生達がいかに楽しく、しかも効果的に学習が持続できるようにアプローチの工夫や教材の考案、開発に必要以上に時間をかけ、その対処に試行錯誤した。

夏季の短期集中であるが故に 学習に対する目的意識や学習意欲などが様々な学生が集まって来たようだが、事前に充分審査して、コースに見合った学生を選考するのが一つの対策だと思われる。特に今後のロータリーの学生のコース参加に関しては、3年も同じ現状が報告されているのであれば、直ちに再考されるべきかと強く感じた。

このような物理的問題はあったが、クラスには協力的でリーダーシップのある中心的存在の学生達があり、彼らのお陰で大変まとまりのある素晴らしいクラスだったと言える。2週目に脱落したロータリーの学生が復帰した時も、何事もなかったように迎え入れ、終始一貫してクラス全体をリードしてくれたことは本当に良かったと思う。

このまとまりとパワーで演じた3週目のロールプレイと学期最後のスキットはC1の目玉だと言える。それぞれの個性が学習した内容に現れ、抜群のチームワークでC1ならではの味のある素晴らしい出来栄であった。又、ビジターセッションで使った『福笑いゲーム』も当時学習中の『場所をあらわす単語』を使って、楽しく面白く学べた思いで深いアクティビティの一つだった。

学習面でも12人中9人の成績優秀者を出し、一部の困難さがあったとは言え 教師冥利に尽きるの一言で言い表せる今年のC1で、この素晴らしい学生達を大変誇りに思っている。

C2		セクション A・B
Ⅰ 担当講師名		
A: 有留寛大 (ヘッド)、永富あゆみ B: 池田佳子 (ヘッド)、今井陽子		
Ⅱ 学生のうちわけ		
学生数 A:16名 (男性7名・女性9名) B:16名 (男性12名・女性4名)		
国籍 A: アメリカ10、フランス2、香港2、台湾1、ベトナム1 B: アメリカ13、カナダ1、ブラジル1、韓国1		
Ⅲ 教材 (書名、扱った課の番号など)		
主教材	『JAPANESE FOR COLLEGE STUDENTS Basic Vol.2』 (第11課～第20課)	
副教材	クラス活動のヒントとして 『日本語コミュニケーションゲーム80』 『ドリルとしてのゲーム教材50』 『クラス活動集101』『続クラス活動集131』 『みんなの日本語初級Ⅰ導入・練習イラスト集』 『みんなの日本語初級Ⅱ導入・練習イラスト集』 『げんき』等を使用 作文の教材として 『みんなの日本語初級 やさしい作文』を使用	

	(第6課：はがき、第4課：家族) 速読用漫画教材として 『日本語ジャーナル』『マンガで学ぶ日本語会話術』を使用 (2003年5月号、2004年2月号)	
視聴覚教材	『ビデオ講座日本語 ⑩やりもらいの表現 (2)』 『ビデオ講座日本語 ⑭日本人のジェスチャー』 『ビデオ講座日本語 日常生活に見る日本の文化⑤』第9話 『新日本語の基礎Ⅱ 復習ビデオ』第1話：宝くじ	
Ⅳ コースの目標		
昨年度黒川先生のお立てになった、以下のコース目標をそのまま踏襲させていただいた。 初級中盤のコースとして、日常の単純で実用的な場面において、日本語でコミュニケーションを図れるようになることを目標とし、読む、書く、聞く、話すの四技能を総合的に伸ばすとともに、日本人や日本文化に対する理解を深める。コース終了時までには、約110漢字を習得し、あわせて日本語のワープロも使えるようにする。		
Ⅴ 評価の基準		
主教材2課終了ごとに行うレッスンテスト (計4回) (文法及び読解 70%、聴解 15%、会話 15%)		40%
最終試験 (文法及び読解 50%、漢字 10%、聴解 25%、会話 15%)		20%
単語クイズ (各課の最初の時間に実施)		
漢字クイズ (各課の学習後に復習テストとして実施)		5%
作文 (「はがき」「家族」の計2回)		10%
プロジェクト (吉祥寺オリエンテーリングの発表及びレポート 30%、 スキット 50%、文集 20%)		10% 10%
宿題 (各課フォーメーション、週日記、授業のプリントなど)		5%
Ⅵ 授業の構成 (1週間／1課のうちわけ)		
基本的に一課の学習に二日をあて、二課が終了した時点で、レッスンテストを行った。各課の導入前に、教科書の新出語彙と文法ノートの予習を宿題として課し、新しい課の最初の時間に、ディクテーションをかねた語彙クイズを実施した。 文法項目は教科書のフォーメーションに基づいて導入し、適宜、教科書のドリルとロールプレイ、および講師が用意したプリントの問題練習を組み合わせながら、練習していった。また、各課の文法項目の導入後、復習として教科書のフォーメーション宿題として課した。 漢字は、新しい課の漢字学習入る時点で、前課で学習した漢字の漢字クイズを行った。 平均的な時間数としては、フォーメーションとドリルに3コマ、ロールプレイ1コマ、読解1コマ、漢字1コマであった。学習が単調にならないように、適宜ビデオやマンガを取り上げると共に、ビジターセッションも行った。ビジターセッションでは、極力、講師のコントロールを少なくし、学生が自主的にビジターと会話できるように心がけた。また、ビジターセッションとプロジェクトの校外学習や文集作成と連動させ、学生がビジターから得た情報を、自らのプロジェクトに反映できるようにし、学生が実践的な会話を楽しむだけでなく、目的意識を持って、日本人ビジターと話ができるようにした。このほか、プロジェクトの文集の作成やスキットの練習、フェアウエルパーティーで披露するパフォーマンスの練習も行った。		
Ⅶ 授業の内容		
⑤ 聞き	授業では、特に聴解練習だけをとりあげることはしなかったが、各課のはじめにはディクテーションを兼ねた語彙クイズを実施し、レッスンテストでも毎回聴解テストを行った。	

⑥	話し	教科書のロールプレイを中心に進めていき、校外学習後の報告会や、学生がしなりを書いて演じる、スキットの発表会も行った。ビジターセッション*や毎週金曜日の授業後に行った Language Table を通して、学生たちは、実践的な会話力を身につけてくれたと思う。また、レッスンテストでも、毎回スピーキングテストを行った。（*ビジターセッションについて補足説明は報告書の後半を参照のこと）
⑦	読み	教科書の読解練習を中心に進め、適宜、日本語ジャーナルの「マンガで学ぶ日本語会話術」なども取り入れた。また、学生間の読解力の差を考慮して、できる学生には授業中の課題を多めにするなどの工夫もした。
⑧	書き	はがきの書き方、原稿用紙の使い方、日本語ワープロの使い方を学習した。宿題として週日記を課し、オフィスアワーの際に添削指導を行った。また、コースの最終プロジェクトの文集では、ワープロで 500～600 字程度の作文が書けるようになった。

VIII 校外学習

日 時	7 月 28 日（木曜日）第 2～3 時限目
行 き 先	吉祥寺駅周辺
活動内容	<p>①事前のビジターセッションで、ビジターの方たちから吉祥寺について話を聞く（吉祥寺はどんな所か、吉祥寺のお薦めスポット等の名前や場所）</p> <p>②実際に吉祥寺に行き、地図を見ながら指定されたオリエンテーリングのポイントをまわり、お店の人やお店に来ている人々にいろいろインタビューをする。これと平行して、学生が自身の「お気に入りの場所」を見つける。</p> <p>③ビジターの方たちから聞いた「吉祥寺のお薦めスポット」と自分が見つけた「お気に入りの場所」についてクラスで発表する。</p>

IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）

セクション A の学生について：

どちらかといえば大人しく、素直な学生が多かった。人との「和」を大切にすると いう意味では、日本社会でうまくコミュニケーションがとれるタイプが集まっていたと思う。男女比も 7 対 9 と女子のほうが多いクラスだったため、女子高のような雰囲気だった。目立つリーダーのような学生はいなかったが、わからない時や困った時には、助け合う様子がみられた。一部の学生を除き、出席状況もよく、きわめてまじめに 6 週間頑張った。こちらが、課した課題などには、不平など一切言うこともなくきちんと取り組み、期日までに提出した。この点では、とても指導しやすいクラスだった。また、読み書きを得意とする学生が多く、授業での作文や課題の週日記などでおもしろいものを書いてくる学生が多かった。授業中しっかりノートを取り、与えられた課題には真面目に取り組む姿勢はすばらしかった。初級とはいえ読み書きの力はかなりあり、夏期講習の間にかなりまとまった文が書けるようになった。ただ、話す力はやや弱かったように思う。聴解力は伸び たのだが、お互い遠慮しあって自分から発話するチャンスをのがしたり、短い受け答えに留まってしまったりしたのが残念であった。自らすすんでどんどん日本語を使ってみようという意識に欠ける学生が多く、授業中こちらが発話を促しても、躊躇しながら、消え入るような声で答えるというケースが多々あった。学生が話しやすい雰囲気を作るよう努力したのだが、コース終了時まで、この点を改善することができず、講師の力不足を感じさせられた。授業の流れも、読み書きに強いというこのセクションの特性を生かし、読み書き練習を先行させ、その中で新しい文型を提示し、口答での練習は後にまわす、というように変えた方がよかったのかもしれないと思う。

セクション B の学生について：

特に大きな問題点はなかったが、このクラスは今回初めて日本に来た学生、長年日本に住んでいる学生と混ざっていたので、どうしてもリスニングとスピーキング力の差がでてきてしまっていた。教師側は、発話力のある学生中心にならないように心がけるのが今回の課題の一つであった。長年日本にいた学生で

fluency がある 学生でも、フォーマルなクラス設定で日本語を勉強した事がなかったせいか、間違った文法を覚えていてその化石化した間違いを直し、accuracy を高めるのには苦勞した。全体的にどの学生も努力をし、プログラム終了時点で各自それぞれの成果を発揮できていたと思う。学生のバラエティとしては、年齢一つをとってもこれから大学一年生という 18 歳から大学の教員など、40 代前後のメンバーがそろっているクラスであったが、こちらが感心するほどチームワークが良かった。日本語のスキルのお互いの秀でている点（スピーキングが得意な者やすぐれた識字力がある者など）をよく認識しており、グループ・ワークを行うと、バランスの良いグループ分けを自ら選ぶようなクラスであった。反省点としては、学生達の日本語の細かいニュアンスに対する関心を満足させることができる授業を C2 のレベルで理解できる日本語で行うことが困難であったことがあげられる。英語教師など、言語に関する理解力がある学生が多かったので、「～つもり vs.～よう」、「現在または過去時制+とき」、授受動詞の「いただけませんか vs. くださいませんか」でつくる依頼表現の語用論的な差異などを明瞭に説明してほしいというリクエストが多かった。こちらでの最善は尽くしたが、次の課への導入などに追われ、やはりじっくりと時間をかけた満足のいくものではなかったように記憶している。もっと多くのサブ教材や文法辞書などを学生に勧めておけばよかったのかもしれない。次回機会に生かしていきたいと思う。

クラス分け：

クラス分けの時点で、上の C3 でも頑張っていけるのではとすすめた学生がいたが、もう一度きちんと復習をしたいという本人の強い希望を尊重し、C2 にとどまることになった。しかし、これが本人から緊張感を奪う結果になってしまったのか、授業も休むようになってしまった。セクション分けは、プレースメントテストのスコアが高かった学生と低かった学生を均等に分配する方法で決めた。C2 のクラス分けに関しては、この例を除き、概ね問題無しだった。

AB 両方に関連する項目

学生数の問題：

AB セクション共に 16 人の学生を抱えていたため、個人指導の時間が限られてしまったのは残念だった。週に一度、15 分程度の個人指導では間に合わない際には、学生本人の希望も聞いたうえでチューターをつけていただいた。これが功を奏し、学生自身から特に苦情はなかった。

C2 で行った特色ある活動について：

①C2 全体で行った特別なイベントとして、ラジオ体操を合同で行ったことがあげられる。ラジオ体操の放送を録画し、日本語のインストラクションにあわせて体を動かす、いわゆる TPR のとして導入した。後半の 2 週間ほどは、毎朝一限または二限目の始めの数分間これを行った。学生が教室内で一日 4 時間もの間机に向かっている毎日が続く中、このような一風変わった試みは新しい風を吹き込むよい材料となった。後々このラジオ体操がさよならパーティーの出し物の基盤となったことも言及しておきたい。

②もう一つ今回新しく取り入れた活動として、会話テーブルがある。これは毎週金曜日の午後 1 時（第三限目の後）から一時間ほど、ICU 食堂にて昼ご飯をとりながら、ゲストの日本人の方と C2 の学生が交流する、というものである。本来の授業の中でもビジターセッションなどで母語話者との対話の機会はあるが、教師が目前にいて管理された上での機会であることは避けられず、どうにかして教室外でのざっくばらんとした環境内でも日本語を話すというチャンスを学生に与えたかったというのが動機である。幸い C2 の学生の幾人かが自ら率先してリーダーとなり、いらしてくださる日本人ゲストを招集したり、食堂での席取りなども行ってくれたので、最初の段取りをこちらが手配するだけでこの活動は開始され、その後も執り行われた。寮などに住みかカジュアルな場での日本人との接触が限られている学生にはとても新鮮な経験だったに違いない。来年度も、このような機会が学生たちに与えられていけばと願う。

③セクション B における特別な試みとしては、ビジターセッションとロール・プレイのクラスの合体をしたことがあげられる。今回の C2 のシラバスでは、70 分授業をその課ごとのロール・プレイのために割くことができる仕組みになっており、それを活用してできる限り日本人ゲストの方に参加いただいて練習を行った。この試みの動機としては、セクション B の学生が非常に積極的に会話力向上を願う学生が多く、

教師ただ一人の目しか行き届かない以前のロール・プレイ方式では追いつかないことが初期段階で判明したことがある。授業の運び方としては、日本人の方と学生がほぼペア・アップし、それぞれの会話能力にあわせてペースをくみロール・プレイのタスクをこなしていった。これにより、学生は非常に活発に発話できており、同時に教師は順にペアを回り文法的なフィードバックなどを能率よく学生に与えることができたのでこのセクションBの学生に限っていえば大成功であったと思う。シラバスや学生達の志向などが都合よく兼ね備わっていれば、このようなビジターセッションの利用の仕方もあるといえるだろう。

C3		セクション A ・ B	
Ⅰ 担当講師名			
A: 安納恵子 (コースヘッド) ・ ヒルゆかり B: 数野恵理 (コースヘッド) ・ 川名恭子			
Ⅱ 学生のうちわけ			
学生数 A: 14 名 (男性 6 名 ・ 女性 8 名) B: 14 名 (男性 8 名 ・ 女性 6 名)			
国籍 A: アメリカ 9 名 ・ シンガポール 2 名 ・ 韓国 1 名 ・ オーストラリア 1 名 ・ インドネシア 1 名 B: アメリカ 13 名 ・ フランス 1 名			
Ⅲ 教材 (書名、扱った課の番号など)			
主教材		Japanese for College Students, Basic Vol.3	
副教材		自作のハンドアウト 参考:『げんき 2』 『続クラス活動集 131』 『Situational Functional Japanese 3』 『日本語の教え方スーパーキット 2』 『絵でマスター にほんご基本文型 85』 など	
視聴覚教材		ビデオ『となりのトトロ』 『ビデオ講座日本語 敬語』	
Ⅳ コースの目標			
日常生活の様々な場面で、状況にあった適切な日本語で効果的にコミュニケーションができるようになる。			
Ⅴ 評価の基準			
クラス参加 (授業参加、宿題提出、文集作成)		10%	
テスト (レッスンテスト、ロールプレイテスト)		35%	
クイズ (単語クイズ、漢字クイズ)		10%	
期末テスト		15%	
作文		10%	
プロジェクト (レポート、発表)		10%	
その他 (オリエンテーリングの作文と発表、ビデオ、リスニング)		10%	
Ⅵ 授業の構成 (1 週間 / 1 課のうちわけ)			
平均、1 課に 6 コマを使い、2 課終了後ごとにレッスンテストを行った。 フォーメーションとドリル			
漢字		2 コマ	
読解		1 コマ	

ロールプレイ		1 コマ
リスニング		1 コマ
また、その他の時間を、作文、プロジェクト、ビジターセッション、オリエンテーリングなどにあてた。		1 コマ
Ⅶ 授業の内容		
⑨	聞き	各課で学習内容に沿ったディクテーションと長文理解の練習問題をした。また、ビデオ「となりのトトロ」を見た。
⑩	話し	各課のドリル、ロールプレイで練習をした。また、オリエンテーリングの発表やプロジェクトの発表をした。さらに、2回のビジターセッションで日本人と会話をした。基本的には教科書の読解文のみを扱い、数回速読としてその他の教材を使用した。
⑪	読み	原稿用紙に4つの作文を書き、添削後に書き直して再提出した。そのうち1つは文集に載せるためにタイプした。また、オリエンテーリングについての作文、プロジェクトのレポート、ビジターへのお礼状を書いた。
⑫	書き	
Ⅷ 校外学習		
日 時	7月25日(月) 2、3 限	
行 き 先	吉祥寺	
活動内容	3、4人グループでオリエンテーリングをした。教室で解散し、バスでそれぞれ吉祥寺に向かい、日本人に質問をしながらワークシートを完成させた。翌週、「おもしろかったこと」について作文を提出し、グループで口頭発表をした。	
Ⅸ 総括(良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等)		
＜良かった点＞		
セクションAは、まじめな学生が多かった。また、授業、オリエンテーリング、最後の出し物等、それぞれリーダー格になる学生がいて、クラス全体としてバランスがとれていてよかった。途中、試験の結果に落ち込んでしまう学生もいたが、見事に立ち直り、短期間で特に話すことが上手になった学生が多かった。特にひどく体調を崩した学生もおらず、皆、元気に6週間を終えられた。		
セクションBはコース前半で成績が芳しくなかった学生の伸びが目立った。母校の授業で日本語をほとんど使っていなかったという学生たちは最初聞き取りと話す力が非常に弱く、授業についていけるか心配していたが、自ら日本人学生とのチューターを希望するなど本人たちのやる気で、聞き取りや話す力がかなりついた。また、単語や文法が不正確で試験結果が悪かった学生が、前半は全く勉強する気にならなと言っていたが、後半になって急にやる気を出し、前向きに頑張り、こちらが驚くほど上達した。短期間でも前向きな態度と学習意欲でいくらかでも伸びる可能性があることが実感できた。		
＜特色ある活動＞		
セクションA、B共に14名で学生数が多かったが、早い時期に学生と教師と一緒に学食で昼食をとったことで、学生同士また学生と教師間の交流が持ててクラス運営がしやすくなった。ビジターセッションでは授業後に日本人学生と昼食をとる時間、社会人といっしょにおにぎりを作って食べる時間を設けたところ、学生に好評でよかった。		
＜反省点と今後の課題＞		
個別指導は徹底が難しかった。文化プログラムやチューターとの約束、その他の個人的な予定と重なって、あまり来ない学生がいた。週ごとにサインアップさせていたが、コース開始時にすべてサインアップさせたほうがよかった。次回は個別指導の内容をもっと工夫して、より有意義なものにしたい。		
プレースメントテスト後のコース分けに関しては、セクションA、Bで異なる問題があった。セクションAでは、C2レベルの実力しかないのに初日にC4にプレースされた学生がC3に移って来たのだが、更にC2に移動させるのは本人のプライドが許さなかったのでC3に残らせることにした。しかし、結局クラスの進行についていけず、本人が苦しむことになってしまった。上から下のレベルに移動させるのは精神		

的ショックを与えることがあるので、このような対処は今後の課題だ。

一方、セクション B では、初級文法は既習だが、C4 には漢字力が足りない学生が、本人たちも納得の上 C3 に残った。しかし、その後学習意欲が低下して、手を抜いているのがわかった。逆に C2 から上がってきて必死でついてこようとした学生はどんどん成績が上がり、最終的には前者と後方で成績が逆転した。少し無理してでも本人にやる気があるなら上のレベルに行かせた方がよかったと思っていたが、セクション A の反省点を聞くと、一概には言えないかもしれない。

C4		セクション A・B・C	
Ⅰ 担当講師名			
A： 後藤多恵 （ヘッド） 貴志佳子			
B： 待鳥直子 （ヘッド） 末田美香子			
C： 濱家優子 （ヘッド） 中川路子			
Ⅱ 学生のうちわけ			
学生数 33 名			
A ： 11 名（男性 7 名・女性 4 名）			
B ： 11 名（男性 5 名・女性 6 名）			
C ： 11 名（男性 6 名・女性 5 名）			
国籍			
A： アメリカ 8 名（うち日系 1、韓国系 1、）、インドネシア 1 名（中国系）、 ノルウェー 1 名、フランス 1 名			
B： アメリカ 8 名、中国 1 名、イギリス 1 名、スペイン 1 名			
C： アメリカ 8 名（中国系 8）・韓国 2 名・カナダ 1 名（韓国系）			
Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）			
主教材		『日本語中級 J301』 「ICU 中級コース 1 漢字」（『日本語中級 J301』 準拠）	
副教材		自作教材（参考文献：市販の中級読解教材、初級文法問題集、会話教材、中級総合教科書等）	
視聴覚教材		ビデオ教材：映画『となりのトトロ』、NHK ドラマ『さくら』ほか 聴解教材：『楽しく聞こう』『わくわく文法リスニング』『初級毎日の聞き取り 50 日』『毎日の聞き取りプラス 40』『中級へ行こう』ほか	
Ⅳ コースの目標			
① 初級コースで習った文法、表現、言葉と新しく習った文法、表現、言葉を使って、正確に聞いたり、話したり、読んだり、書いたりできるようになる。			
② 長い文章を読んだり、まとまった内容を話したりできるようになる。			
③ 書き言葉と話し言葉の違いが区別でき、説明、意見、感想などが正しいスタイルで読み手にわかりやすく書けるようになる。			
④ ひとつの文ではなく、いくつかのつながった文でまとまった話を、相手や場面によって言葉のスタイルを使い分けて話せるようになる。			
⑤ テープやビデオ、看板や雑誌広告等から必要な情報が取れるようになる。			
Ⅴ 評価の基準			
クラス参加（授業参加、宿題提出、作文練習ノート）		10 %	
『日本語中級 J301』 レッスンテスト（4 回）		20 %	
『日本語中級 J301』 単語クイズ（各課）		5 %	

『日本語中級 J301』漢字クイズ（各課）		10%
作文練習ノート		5 %
作文（4 回）		10 %
スピーチ（2 回）		10 %
プロジェクト		10 %
期末試験		20%
VI 授業の構成（1 週間／1 課のうちわけ）		
主教材（漢字・文型・語彙・本文・練習含む）		8 コマ／週
副教材（聴解練習、速読練習、初級文法復習、クイズなど）		3 コマ／週
会話・読解・ビデオ		各 1 コマ／週
レッスンテスト		0.8 コマ／週
歌など		0.2 コマ／週
主教材は平均 3 日で 1 課を終えるよう時間割を組んだ。1 課にかけた時間は 6～7 コマで、そのうちわけはセクションごとに計画を立てた。1 日の平均的な指導内容は、「毎日の練習」（聴解/速読）とクイズ（語彙/漢字）、初級文法の復習（必要な場合のみ）、主教材の学習、そして技能別学習（読解/会話/ビデオ/作文など）である。これらの指導内容の構成に関しては、毎日「読む活動」と「聞く活動」が入るよう配慮した。		
VII 授業の内容		
⑬	聞き	(1)「毎日の練習」として、初級文型を使った会話の聞き取り練習をさせた。(教材はセクションごとに選択) この聴解練習は、学生ができるだけ早く日本語の音に慣れるようコース前半では毎日練習を行い、コース後半は速読練習と交互に練習ができるようカリキュラムを組んだ。(2) 主教材の学習にもできる限り音声教材を使用した。(3) ビデオ教材による授業を 4 回行った。(4) 週 1 回のレッスンテストの後に日本語の歌を学ぶ時間を設けた。
⑭	話し	(1) ビジターセッションを数回(A・B セクションは 2 回、C セクションは 3 回) 行い、日本人とまとまった話をする経験をさせた。(2) 会話の授業でスピーチやディスカッションの指導をした。(3) 主教材の学習内容に応じて、随時ディスコース練習や会話練習を授業に取り入れた。
⑮	読み	(1) 主教材『日本語中級 J301』の本文は第 1 課から 10 課まで全て授業で扱った。(2) 独立した「読解」の授業を 5 回設け、主教材にない種類の文章を扱った。(教材はセクションごとに選択) (3)「毎日の練習」として、コース後半から 1 日おきに速読練習を行った。(教材はセクションごとに選択)
⑯	書き	(1) 大きな作文の課題として、長い作文を 2 回(課題:「日本語を勉強し始めたきっかけ」「印象に残った出来事」と実用的な手紙を 2 回(「依頼のメール」「お礼状」) 課した。(2) 日々の授業との関連で、短文作成練習や感想文などを課した。(3) 個人プロジェクトでは、アンケート/インタビュー調査の質問項目を作成し、その結果を発表原稿にまとめる作業をさせた。
VIII 校外学習		
日 時	7 月 27 日(水) 1～3 限目	
行 き 先	NHK 放送局(渋谷)	
活動内容	NHK 放送局を訪ね、スタジオを見学した。今回のスタジオ見学は、街鳥講師の縁故により、特別な許可を得て実現したものである。見学したスタジオは、「義経」、「ためしてガッテン」、「ほっとモーニング」の 3 箇所である。見学は NHK 職員の方の案内のも	

	と、小グループに分かれて行われた。「義経」のスタジオでは、収録の現場を見ることができ、あとの2箇所では、学生が自由にスタジオ内を見てまわったり、写真を撮ったり、職員の方に質問することなどができた。
IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）	
1. コース全体	
a) コースデザイン	<p>コースの目標は昨年度と同様だが、今年度から指定教科書が変更になったことで、シラバスを大幅に変更した。カリキュラム編成で留意した点は、87コマという限られた枠の中に、指定教科書を1冊終えられるだけの時間数を確保しつつ、サマーコースらしい特色のある学習や活動を残すことであった。今年度は新体制のもと、手探りの状態でコース運営をしたわけだが、Cセクションのヘッドからは次のような反省点が出されている。「指定された教科書を終わらないといけないということに圧倒され、そのための課題、試験が多く、もう少し余裕を持って、学習事項を定着させられなかったこと、それから、その他、教科書をはなれての活動（ビジター・読解・スピーチ・ビデオなど）を制限しなければいけなかったことは、残念であった。」指定された春/秋学期共通の指導内容とサマーコースらしい学習や活動を、いかにバランスよくカリキュラムに組み込むか、C4の今後の最大の課題であろう。</p>
b) プレースメント	<p>今年度は、実力がC4レベルに十分に達していないと思われる学生が多かった。そのため、コース全体のレベルが例年より低くなったように感じている。初級の項目が十分定着していない学生や四技能が揃って伸びているわけではない学生をC3かC4、どちらのコースに配置するか見解の分かれるところであろうが、特にICUの秋学期に残る学生に関しては、サマーコース期間中にC3で十分な基礎力と運用力を養うことが望ましいように感じられた。6週間という短い期間でC4レベルの日本語力を身につけるには、十分な基礎力が必要であると、当コースの担当講師全員が痛感している。今後はサマーコースのC4の基準を明確化し、より厳しい条件設定を検討されたい。</p>
c) セクション分け	<p>読み書きの能力に比べて話す能力が秀でている者をAセクションに集め、四技能が平均的に伸びている学生をBとCセクションに集めた。このクラス分けはやや大胆な試みであったが、結果的には日本語力のタイプの似ている学生を集めることで、クラスのニーズが明確になり、教師側は指導がしやすかった。各セクションとも学生数が11人とさほど多くなかったため、教師が各学生の学習上の問題に個別に対応できた。</p>
c) 教材	<p>教材は漢字テキスト以外全てこのコース期間中に新しく作成した。C4が3セクションになったので、コース共通の教材作成を6人で分担することができたことは幸いであった。</p> <p>コース共通で作成した教材類は、語彙フラッシュカード（ラボ助手の方が作成）、漢字カード、漢字練習シート、漢字クイズ、語彙クイズ用シート、レッスンテスト、期末試験で、セクションごとに作成したものは、文型ワークシート、漢字ワークシート、読解教材、会話教材、初級復習教材、ビデオ教材および歌教材（一部A・B共通）などである。個人プロジェクトや作文のハンドアウトは、昨年度のC4とC3の教材を参考にした。</p>
d) 『日本語中級J301』の指導	<p>今年度は、通常学期の予定のように3課からではなく、第1課から始めることにした。第1課から始める長所は次の通りである。(1) コース開始直後の学生が固定されない時期に第3課を扱うのは困難なので、第1、2課があるとウォーミングアップになってよい。(2) 初級の学習項目が十分に定着していない学生のためには、初級の復習として第1課から始めるのは意味がある。一方、短所は次の通り。(1) 6週間で10課分を扱うには時間がたりない。(2) コース開始時に第1課だけを見て、C4の学習が簡単すぎると思ひ込む学生が出る。C4の担当講師の見解としては、教科書の学習は第3課から始め、早いうちに教科書を</p>

終わることが重要だろうということである。その際、第 1～2 課は読解の時間に扱うという可能性があらう。

e) 特別活動

①個人プロジェクト

日本に関することをテーマにインタビュー調査またはアンケート調査をするプロジェクトを課し、コースの最後に発表することをひとつの大きな目標とした。テーマ選びから調査結果のまとめまでは、午後の個人面談の時間を利用して個別に指導した。発表は 3 セクション合同で行ったが、発表当日は数々の問題が生じた。発表会場にマルチメディアルームが使用できなかったことで、機種の違いによるコンピュータのセットアップに時間と労力がかかった。また規定の時間を大幅に超えて発表をする学生が多く、発表が 1 日では終わらなかった。そのため 1 セクション分の発表は翌日に繰り越す形になった。この反省から、プロジェクトの発表会場には必ずマルチメディアルームが使えるようコース開始時に教務側で調整してほしいという要望が出されている。

②スピーチ

個人プロジェクトの発表に向けて、パブリックスピーキングの練習として行った。発表はセクションごとに行い、評価した。時間に余裕がなかったため、発音指導や原稿指導に十分な時間をかけることができなかったのは残念だった。しかしながら、学生にとっては人前で話す経験ができ、またスピーチを通してクラスメートを知ることができ、よい機会になったことであろう。

③ビジターセッション

A・B セクションは 2 回、C セクションは 3 回ビジターセッションを行った。1 回目に学生ボランティアとのセッション、2 回目に社会人とのセッションを設けた。学生が来日後早い段階で日本語の会話に慣れることができるよう、ビジターセッションを第 2 週目と 3 週目に設定した。学生と同数のボランティアの方に来ていただくことができたため、学生はペアになってゆっくり話すことができ、大変いい練習になったようである。

2. 各セクションの様子

a) A セクション

A セクションは、クラスのほとんどが初級項目を緻密に積み上げられていない者で構成されていたため、読解中心の教科書を 6 週間で終わることは非常に困難であった。漢字を書いたことのない学生や基本的な文法知識のない日系の学生、話し言葉でしか作文が書けない学生など、各学生が抱える問題も同様ではなかったため、個人面談の時間に個別に問題に対応した。C 2 レベルの文法から教える必要のある学生もあり、その個別指導には 1 人 1 時間以上かかることもあった。また、成人学習者が 2 人おり、彼らを他の学生と全く同じように扱うことが難しく、その対応に多くの時間を割いた感がある。初級文型の復習は授業で毎日少しずつ扱うほか個人指導として学生の質問に応じたつもりであったが、結果的に学生からは「もっと初級の復習をしてもらいたかった」という意見が出された。当セクションの学生にはコースの初めに十分な初級の復習期間を設けておく必要があったと感じている。主教材の進め方に関しては、当セクションの学生の多くが日本語を耳から習得しているということで、主教材の本文読解には CD を数回聞かせてから読ませたり、ペアで話し合いながら内容把握の問題に答えさせたり、本文の内容をテーマにディスカッションをさせたりして、学生が苦痛を感じずに読解や語彙・文型の学習ができるよう配慮した。また漢字の指導には特に力を入れ、コース前半では漢字の書き方の基礎から指導した。書くことに慣れるにしたがい漢字を書く作業にかかる時間が減り、コース後半は漢字語彙を増やすことを目標にした。どの学生も最後には立派な字が書けるようになり、学生たちにとってはそれが大きな自信につながったようである。

当セクションでは学生の話す能力を生かして、「お互いを知る」をテーマにした活動を授業の中に組み込んだ。常に学生同士の交流が生まれる教室活動を目指したが、特に大きな活動は次の通り。(1) 週末何をしたか報告しあう (2) 作文の課題「日本語を学んだきっかけ」をスピーチとして発表する (3) 推理物の読解文を読み、話し合いで犯人を探し当てる (4) 捕鯨についての賛否を議論する。以上の活動では、学生

に必ず発表者に質問することを求め、積極的に人の話を聞く訓練をさせた。この試みはコース後半には実を結び、通常の文型練習時などでもディスカッションが始まるまでになった。大変個性的な学生が多かったが、それぞれ相手の個性を尊重しつつ自分のことを自由に話ることができるようになり、大変いいクラスになったと感じている。

b) B セクション

B セクションは初級の学習がよく定着しており、読み書きが得意な学生ばかりで、読解や作文は積極的に取り組んだ。その反面、聴解と会話が苦手で、授業中に発話を促すのに大変苦労した。しかし、6 週間で日本語の運用にも慣れ、コース最後の個人プロジェクトでは、どの学生も立派に口頭発表することができた。

良かった点は、次の4点である。(1) クラスのサイズが小さく、会話やディスカッションに都合がよく、またチュートリアルスケジュールにも余裕があった。(2) 国籍、文化背景にバラエティがあり、学生同士のコミュニケーションに日本語が多く用いられた。(3) ビジターセッションがコース開始の早い時期にあり、学生の学習動機を高めるのに非常に役立った。(4) マルチメディアルームでワープロと日本語でのネット検索を学習できた。

B セクションの特別な活動は次の通り。(1) スタジオを用いて、スキットとスピーチの練習をコース前半に行った。ビデオで見直すことができたので、その後の発話練習、プロジェクト発表のためにより経験となったようだ。(2) 漢字の構造と筆順の理解のため、象形文字、指示文字、形声文字の説明をした。部首を手がかりに漢字の意味を推測したり、効率よく形を学ぶ助けになったと思う。

c) C セクション

C セクションは、読む、書く、聞く、話すの4技能のバランスがとれているだろうと思われる学生を中心に集めたセクションであった。偶然にも11人全員がアジア系のバックグラウンドを持った学生であった。7週間を通してほとんど目だった欠席・遅刻もなく、まじめにクラスに参加をしていた。全体的にとっても明るく、素直な学生たちであった。クラスの中には、大学教授もおり、当初、学生との関係が心配されたが、始まってみるとそのようなことは全くなく、とても和やかな雰囲気を楽しそうに授業を受けていた。

C セクションでは、指定された教科書の内容を勉強しながら、全体的に読む力、文法力、話す力は、以前に比べて伸びが見られたと感じる。新しく習った文法事項をクラス内での会話やディスカッションに使う姿勢がよく見られた。書く力も作文を通して、上達したように思われる。とくに、最後の「印象に残ったこと」について書いた作文は、表現力も豊かであり、内容的にも興味深いものが出来上がった。教科書に準拠するワークブックがなかったこともあり、ほとんど、教師側で練習問題を準備しなければならなかった。また、その文法は、本文からとった文法事項であったので、書き言葉的な表現が多く、なかなか会話の中で練習できなかった。そのようなこともあり、当クラスでは、そのような文法事項には、話し言葉での表現も導入し、文を作らせたり、話させたりして、工夫した。また、リスニングの練習は、ほぼ毎日行った。教科書からだけでなく、生のテレビ番組などを使って工夫して行った。学生は、楽しんで聞く練習を行っていたようである。

ファイナルインタビュー/アンケートプロジェクトでは、素晴らしいものが出来上がった。ほとんどの学生がパワーポイントのプレゼンテーションを行った。クラスで、もっと書いたものを読む練習時間が取ればよかったと思う。

日本人によるビジターセッションは、C セクションでは、3回行った。1回目は、日本人学生と、2、3回目は、社会人の方で行った。学生は、はじめは緊張していたようだが、生き生きと楽しく、会話していたようだった。

コースを通して、クラスの雰囲気は、非常によく、学生にとってもまた担当教師にとっても心地よく、授業がしやすい環境であった。コース終わりに「印象に残ったこと」の作文とファイナルプロジェクトを文集にしてまとめた。

C 5		
Ⅰ 担当講師名		
二宮理佳（コースヘッド） 松本ゆみ		
Ⅱ 学生のうちわけ		
学生数 11 名（男性 5 名・女性 6 名）		
国籍 アメリカ 9 名、フランス 1 名、シンガポール 1 名		
Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）		
主教材	『文化中級日本語Ⅱ』『我が社の小さな製品（ウォークマン）』（抜粋） 『日本語中級 J501』 スリーエーネットワーク（1 課～6 課） 『ICU 中級コース 2 漢字』 ICU（1 課～6 課）	
副教材	『テーマ別中級から学ぶ日本語』 『中上級者のための速読の日本語』 『ロールプレイで学ぶ中級から上級への日本語』	
視聴覚教材	『毎日の聞き取り 50 日（上・下）』 凡人社 『楽しく聞こうⅡ』 凡人社 テレビ番組各種（ドラマ・アニメ・ドキュメンタリー番組）	
Ⅳ コースの目標		
中級中盤のレベルで四技能が総合的に使えるようになることを目標とした。具体的な目標は以下のようである。 <ul style="list-style-type: none">・ フォーマルにスピーチをしたり意見交換ができる。場面や相手によってスピーチレベルを変え、適切に話せる。・ 話し言葉と書き言葉の区別ができ、適切なスタイルで意見文やレポート、エッセーが書ける。・ 要約・叙述・描写・説明・報告ができる。・ 自然な速さの日本語を聞いて、必要な情報、または大意がとれる。		
Ⅴ 評価の基準		
クラス参加（出席／宿題）		10%
作文（家で書く作文 4 回／クラス内で書く作文 1 回／期末作文テスト）		10%
聞き方（ビデオ・テープ教材のワークシート／中間・期末テスト）		10%
話し方（スピーチ 2 回／ミニレクチャー 1 回）		10%
クイズ（漢字＋言葉クイズ／文型クイズ）		10%
中間テスト（漢字・言葉・文型・読解／口頭テスト）		20%
期末テスト（漢字・言葉・文型・読解／口頭テスト）		20%
インタビューリサーチプロジェクト（発表／レポート）		10%
Ⅵ 授業の構成（1 週間／1 課のうちわけ）		
課によって異なるが 1 課の基本的な配分は以下のようである。 （ ）は、予習中心（クラス前に準備が必要）か復習中心のクラスかを示している。		
テキスト		
漢字（予習＋復習）		1 コマ
言葉（予習）		1 コマ
文法＋練習 A（復習）		1 コマ（～2 コマ）
読み（＋要約／意見交換）（予習＋復習）		2 コマ
書いてみよう／作文（復習）		（1/2～） 1 コマ

言葉のネットワーク（復習） その他 スピーチ／ミニレクチャー（予習） リスニング（テープかビデオ教材）（復習） 日本人とのセッション（予習） 話し方（サバイバル日本語・ロールプレイ）（復習） 速読 プロジェクト	1 コマ 1 課に 3 ～ 4 コマ
--	---------------------------

VII 授業の内容	
⑰ 聞き	テープ教材とビデオ（ドラマ・アニメ・ドキュメンタリー番組の録画）を使用し、大意取り、ディクテーション等を通して内容を把握し、時間が許せば簡単な要約やディスカッションをさせた。
⑱ 話し	日常生活で使用頻度が高いものや、スピーチレベルを微妙に変えながら話さなくてはスムーズにタスクが達成できないような設定でのロールプレイを扱い、数日後に指名しておいたペア 2 組にターゲットの表現を盛りこんだ短いスキットを披露させた。また、敬語・意見の言い方の練習の時間もとった。上記の項目をクラスで練習した上で日本人のひととの会話練習に臨ませた。その際、意見交換をする前作業としてパートナーの日本人に、その週に学んだ読解の内容も要約として伝えさせた。その他、日本人へのインタビューを通して個々のテーマで調べたことを発表するプロジェクトを行った。また新出語彙も本文読解に入る前に、会話の中で積極的に使わせる時間を 1 コマ設けた。 テキストの本文を使って精読の練習をし、要点や全体の構成、筆者の主張を把握し、要約や内容に対する自分の意見を述べたり文章に書いてまとめたりした。練習 B は適宜使用した。他に速読教材を数回使用した。
⑲ 読み	テキストの「書いてみよう」は適宜参考にした。作文は、表現等を導入後、残りの時間と家で書いてくる作文を 3 回、事前に課題を与えておき、クラス内で書く作文を 1 回行った。原稿用紙の使い方も指導した。
⑳ 書き	

VIII 校外学習	
日 時	7 月 22 日（金）
行 き 先	NHK スタジオパーク（渋谷）
活動内容	①（わからなかったら人に聞きながら）渋谷駅のハチ公前に来る。 ②NHK スタジオパークで、ガイドの人の説明を聞いたり、用意された種々の活動（アテレコ、アナウンサー体験等）を通して教室とは違う日本語の表現活動の体験をすると同時に、クラスメート・教師と友好を深める。 ③この日の体験と感想を A41 枚程度にまとめて提出する。

IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）	
四技能を総合的に組み合わせながら授業が進むよう配慮し、どの種の授業にも適当な量の口頭練習も組み込むようにした為、話す練習が特にしたいと言っていた学生の欲求も満たせていたようだ。まじめで素直な学生が多く、授業での活動を通して早い時期からお互いに打ち解けていたのでクラスの雰囲気も明るくなごやかだった。学習意欲も高く、コース開始直後から、授業以外でも学生同士の間で自然と日本語だけで会話をする雰囲気が作られていた。クラスの数も 11 人だったので、個別指導で個々の	

学生のニーズにもある程度対応できたと言える。結果としては、四技能を総合的に伸ばすことができた学生も多い。

全体に聴解力が弱く、中には非常に心配な学生が何人かいたが、クラスでのアナウンス等は日本語で行うことを基本としたので、週が進むにつれ徐々に改善されていった。しかしながら最終週まで、どこかを誤解して聞いていたり、わかっていない学生も見うけられ、クラスでの連絡事には少々苦勞した。

反省点としては、聴解力をつけるためにももう少し早い時期に集中的に効果的な練習が組み入れられなかったかという点である。ただ、スケジュール上それだけの余裕がなかったのも、難しい課題である。また、活用や発音等の間違いが化石化してしまっている学生が何人かいたが、気が弱かったり反対に強かったりしていた為、自信を失わせないように信頼関係がしっかり築けてから、または学生に余裕のあるときに等と考えていた為、この学期中に直してしまえるくらい早い時期に指摘し適切に指導できなかったのは悔やまれる。

また、日本に滞在しているという利点を生かし、積極的にクラスの外の経験や学びを教室に持ち帰り日本語で表現したり、教室で学んだことを外の環境で実践することを終始奨励した。学生もそれに応えていたのだが、更にもっとこの点を意識した課題や活動を加える可能性を探ることも今後の課題である。

教科書についてだが、今回から使用することになった教科書はC5のレベルとして決して易しいものではない。第1課から「文化と偏見」といった抽象的なトピックを扱っているため語彙が難しい。トピックとしても初対面の学生たちが意見交換したりするには重すぎる。更に1つ下のレベルから上がってくる学生のレベルを考え合わせると、もっと身近なトピックの読み物の方が適当だと判断し、「ウォークマン」の開発にまつわる話の読解教材を1課の前に入れた。また全課を通して新出語彙の数も多いので、クイズやテストの対象になるもの・ならないもの等を取捨選択し、学生の負担を減らした。そして課によっては、覚えるべき言葉の数のみを指定する部分を設け、其々に選ばせ、ミニレクチャーをさせたりし(例 L2: 40個ちかく紹介されている「体の一部を使った慣用語」を2つ選んで、意味・使い方・会話の中での使用例等をミニレクチャーとして説明する。②テストまでにあと2つ選んで説明できるようにする。)、負担を軽減しながらも、使える語彙・表現の拡張をはかった。

学生のレベルの移行についてだが、今回の教科書のレベルの高さを考え、C4とC5の境界線にいる学生にはC4をとることを強く勧めた。しかしながら、オーラルと作文の判定が出される前とは言え、一旦入れられたレベルから下のレベルに行かされることには非常に抵抗を感じるようである。結局、C4に行くことを勧めた全ての学生がC5に残った。その中の数人とC4から上がってきた学生は、後半息切れし始め、一人は気持ちが少し落ち込みぎみになっていった。

これは教科書の問題だが、C4の教科書とC5の教科書の難易度にはかなり大きな差がある。また、C4の教科書の最初には初級の復習も多数含まれているため、コース開始間もない時に、C4が適当と判断されたC5の学生をC4のクラスに見に行かせると、簡単すぎるので絶対に行きたくないと固く心を決めてC5に戻ってくる。C4とC5の教科書のレベルのギャップをどう扱うかという点と、上述のようなケースをどう解決するかについては、今後熟考を要すると考える。

また、聴解力の弱さを指摘するにしても、プレースメントテストでははかっていないため、客観的に納得させるものがない。こちらの言っていることが明らかに聞き取れていないと見てとれても、本人が聞き取れていると強く主張している場合、まだ教師への信頼関係ができていない段階では、それ以上否定したり一方的に英語にスイッチして説明することは難しい。C5に残るなら、非常な努力が必要だということ、どんな結果になろうとも本人の決定の結果であること、クラスでの説明をはじめアナウンスなど聞き取れない場合、教師やクラスメートに聞きに行く等の対処は本人の責任であること等の基本的な条件を理解させるのに非常に苦勞した。授業開始後に個々のクラスで聴解の実力テスト等を設けることは可能だが、学生を納得させるという点ではプレースメントより効力が落ちる上に、日にちがたてばたつほど下のレベルへの移動には心理的な抵抗感が強まる。従って、やはりプレースメントに適当な聴解部分を加えることは必要ではないかと考える。ご一考をお願いしたい。

C 6	
Ⅰ 担当講師名	
野中陽子（コースヘッド） 川上麻理	
Ⅱ 学生のうちわけ	
学生数 12 名（男性 6 名・女性 6 名）	
国籍 アメリカ 11 名（うち日系 2 名・中国系 2 名・韓国系 1 名）、フランス 1 名	
Ⅲ 教材（書名、扱った課の番号など）	
主教材	『日本語中級 J501』第 7 課～10 課 『日本語中級 J501』に付随する ICU で作られた漢字テキスト
副教材	『Intermediate Kanji Book Vol.1』第 2 課～第 5 課 『中・上級日本語教科書 日本への招待』テーマ 1、3 『中級からの日本語』第 10 課 『速読の日本語』 『外国人がよく聞く日本語日本事情』 新聞記事
視聴覚教材	NHK ビデオ「ちゅらさん 総集編」Vol.1～3 NHK ビデオ「吉田兄弟」 『毎日の聞き取りプラス 40（下）』第 21 課～第 35 課
Ⅳ コースの目標	
中級最後のクラスとして、日本への文化理解を深めながら、以下の四技能を伸ばす。	
<u>聞き</u> ：（1）テレビドラマや映画、日本人の日常会話を聞いて概要がつかめる。	
（2）教師やクラスメートの話や発表を聞き、細かい所まで詳しく理解できる。	
<u>話し</u> ：（1）場面や相手によって、適当なスピーチスタイルを選んで話すことができる。	
（2）聞き手にわかりやすく、段落単位であったことの説明や報告ができる。	
（3）インタビューができる。	
（4）ディスカッションができる。ディスカッションの司会、進行役ができる。	
（5）書き言葉と話し言葉を使い分けることができる。	
（6）自分が書いた論文をわかりやすく、発表できる。	
<u>読み</u> ：（1）未習事項の入った読み物でも周りの言葉から内容を推測し概要がつかめる。	
（2）新しい表現、語い、漢字を正しく理解し複数段落の文章を理解できる。	
（3）インターネットや新聞など図や表の入った生教材から必要な情報をくみとることができる。	
<u>書き</u> ：（1）文単位：新しく習った表現や漢字を使い、正しい文を作ることができる。	
（2）文章単位：豊かな表現、接続詞を使い、段落を作って文章が書ける。	
（3）論文単位：あるテーマについて、読み手が納得できるように、客観的証拠を用い、わかりやすく順序だてて書くことができる。	
Ⅴ 評価の基準	
出席・授業参加	10%
宿題	10%
漢字クイズ	10%
3 分間スピーチ・日記（週 3 回以上）	5 %
ディスカッションの司会	5 %
テーマ別テスト（読解・作文・スピーチ）	30%
期末テスト	10%
ポートフォリオ	5 %

論文プロジェクト（論文10・発表5）		15%
聞き取り（15回以上）		3%（エクストラ）
VI 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）		
主教材1課／3日（4日目は筆記試験・口頭発表・論文作成）		
1 限目：主教材付随の漢字テキスト1課分を2日です		2 コマ
ことば、語彙を広げる（ことばのネットワーク）		1 コマ
2、3 限目：文法		2 コマ
読解		1 コマ
会話		2 コマ
ビデオ		1 コマ
VII 授業の内容		
21	聞き	教師及びクラスメート、日本人ビジターとのディスカッション、発表を聞く。 ビデオ「ちゅらさん」「吉田兄弟」、毎日の聞き取りプラス（下）
22	話し	1 限目の漢字、ことばのクラスの最初に2名ずつ3分間スピーチをする。 ビデオ、文章読解、ディスカッションの時間に順番で司会をする。 1 課終わるごとに自分の意見を発表する。論文プロジェクトで発表する。
23	読み	主教材を自分で読み、ワークシートをやって授業にのぞむ。（精読） 新聞やプロジェクトのための生教材をその場で読み、概要をつかむ。（速読）
24	書き	文法を習った後の例文づくり、ビデオを見た後のまとめ、日記、各課ごとの作文（全5回）、 期末作文、論文プロジェクト
VIII 校外学習		
日 時		7月29日（金）
行 き 先		NHK スタジオパーク
活動内容		ドラマの製作過程及びニュースが放送されるスタジオの様子を見学した。日本のドラマに興味を持っている学生が多く、現在放送中のNHK大河ドラマ「義経」の撮影が見られることを楽しみにして行ったが、時間が合わず、見られなかった。しかし、撮影現場の様子を見たり、クラスの一人がニュースを読ませてもらい、その収録過程をみんなで見て、 して全体的には楽しめたように思われる。その後、渋谷から原宿まで歩き昼食をとり解散した。 7月下旬の渋谷で待ち合わせをするとほんの少しの遅刻でも、他に待っているクラスメートは暑さで気分が悪くなってしまうので、待ち合わせ場所と時間には相当気をつけるか、直行バスを利用したほうがよいと思われた。
IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）		
基本的に昨年のカリキュラムを踏襲したが、昨年度やって良かったことはさらに効果的に実践できるよう工夫した。良かった点は1課終わるごとにテーマに関する作文を書かせ、スピーチさせたことで、スピーチは場慣れさせるために毎回スタジオで行いビデオ録画した。作文、スピーチのそれぞれに対し毎回フィードバックを与え、学生には次の時には気をつけるよう喚起し、最終目標を最後のプロジェクト発表に掲げ激励した。結果、最後のプロジェクト発表では一人一人が自分の弱点を克服し成果を出せた。 毎回作文提出及び発表の前日にディスカッションと日本人ビジターセッションを組み込んだこともクラスメートや日本人と意見交換しアイデアを膨らますいい機会になったようだ。反省点は作文はフィードバックを見ながら書き直するように進めたが、実際三日に1課という速さで進めていたため、前に書いた作文を返してもらった頃には次の作文を書かなければならず、なかなか書き直しまで手が回らなかったことである。また、スピーチは録画はしたが、それをもう一度学生に見せて効果的に次のスピーチに活かすことまでできなかった。もう少し1課に時間をかけ4日から5日で進めても良かったと反省する。		

今年の C6 の学生は漢字が好きな学生が多く、テキストの読み書きは自分でさせ授業では前日にワークシートを渡しその漢字を使って文を作ったり想像力を働かせたりするタスクを与えクラスで発表させたがこれは非常に成功し学生は楽しみながら力をつけたようだ。

また学生にディスカッションの司会をさせ学生主導にさせたこともクラスメートの意見を聞きそれを自分の言葉でまとめるというタスクを通し、互いが言うことを聞いて理解する力がコースを通してついたように思われる。

昨年度の反省の学生の日本での生活をクラスに結びつけるという目標に対しては、日本で日々感じることを日記につけさせ、そのうち一つを選んで3分間スピーチでクラスメートに問題提起させるようにした。学生は他にどんな宿題があっても教師側が期待した以上に毎週様々な出来事や考えを数ページにわたり書いてきた。

本年度の反省としては、読みに関して、指定の教科書に追われていたので、日本にいるからできるような活動（毎日必ず新聞を読ませる等）をもっとすべきであった。

C 7	
I 担当講師名	
佐藤由紀子（コースヘッド）・黒川直子	
II 学生のうちわけ	
学生数 7名（男性 3名・女性 4名）	
国籍 シンガポール2名、アメリカ2名、台湾1名、フィンランド1名、イギリス1名	
III 教材（書名、扱った課の番号など）	
主教材	<p>新聞記事（朝日、日経）、経済誌記事（『週刊ダイヤモンド』）、日本語教科書『生きた素材で学ぶ 中級から上級への日本語』（ジャパントイムス）『日本への招待』『文化へのまなざし』（東京大学出版会）『国境を越えて』（新曜社）</p> <p>一般書籍『ケータイを持ったサル』（正高信男）『日本人の価値観』（高橋徹）『日本語を書く部屋』『最後の国境への旅』（リービ英雄）『やがて哀しき外国語』（村上春樹）『蜘蛛の糸』（芥川龍之介）『日本ジジババ列伝』（清水義範）『キッチン』（吉本ばなな）『号泣する準備はできていた』（江國香織）『ダニエル先生ヤマガタ体験記』（ダニエル・カール）『見知らぬ妻へ』（浅田次郎）『窓際のトットちゃん』（黒柳徹子）</p>
副教材	『どんな時どう使う日本語表現文型 500』より抜粋 『INTERMEDIATE KANJI BOOK Vol. 1』 凡人社
視聴覚教材	ビデオ（NHK テレビドキュメンタリー番組、クイズ番組、娯楽番組など）
IV コースの目標	
<p>このコースは日本語上級コースであり、これまで学習した中級レベルまでの日本語力（話す、聞く、読む、書くの4技能）にさらに磨きをかけ、より母語話者の日本語に近いレベルまで到達することを目標とする。具体的には、1）これまでに学んだ漢字、漢字語彙の知識を整理、拡充する。2）これまでに学んだ文法項目の知識を確実なものにするともに、新たな表現文型を学ぶ。3）新聞記事を中心にいろいろな文章が読めるようにする。4）ビデオを見る、日本人会話ボランティアの話を聞く、などを通し、生の日本語を聞き取る力をつける。5）書き言葉と話し言葉、敬語の使用など、文体の違いを意識し、場面や状況にふさわしい文章表現および口頭表現ができるようにする。6）学生各自が選んだテーマについて、調査、研究をしてレポートを書き、口頭発表をする、などである。</p>	
V 評価の基準	

中間試験（漢字、表現・文型、語句、読解）	10%
期末試験（漢字、表現・文型、語句、読解、面接）	10%
課題研究レポート	10%
課題研究口頭発表	20%
テーマ・レポート（作文）	10%
テーマ口頭発表	10%
小テスト（漢字・文型）	10%
宿題提出（読解予習シート、ビデオ・ワークシートなど）	10%
授業中の討論への参加・授業態度	10%
合計	100%
VI 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）	
週によって異なるが、およそ以下の内訳で行った。	
読解	4～5コマ
漢字・語彙	2コマ
表現文型	2コマ
ビデオ視聴	1～2コマ
討論（原則として会話ボランティアと）	2コマ
口頭発表	2コマ
その他（自由課題研究の指導など）	1～2コマ
VII 授業の内容	
25 聞き	テレビのドキュメンタリー番組や啓蒙娯楽番組などのビデオを見て内容を理解する、校外学習活動でボランティアガイドさんの案内を聞いて理解するなどを「聞き」の活動とした。
26 話し	毎日の授業は全て教師と学生との口頭でのやり取りで行う形式だったので、全授業において「話し」の活動は行われた。また、学生同士や会話ボランティアとの討論（毎回テーマを決めて意見交換をする形をとった）では集中的に話す訓練を行った。さらに、コース中3回の与えられたテーマに関する15分程度の口頭発表と自由課題研究の最終口頭発表が「話し」の活動に当たる。
27 読み	各週5コマ程度の読解授業が「読み」の訓練の中心であるが、漢字・語彙の授業、表現文型の授業、ビデオ視聴時のワークシートなども読みの練習を伴っていた。
28 書き	読解授業に先立つ予習シート作成とコース中3回課したテーマ作文が「書き」の練習を目指したものである。さらに、コースの最後に提出させた自由課題研究レポート（アウトライン、初稿、最終稿を提出）は「書き」の訓練の集大成である。
VIII 校外学習	
日 時	7月28日（木）
行 き 先	江戸東京博物館
活動内容	C8との合同活動。博物館のボランティアガイドの方に日本語で館内を案内して頂きながら、江戸ゾーンを中心に東京ゾーンも見学し、江戸の人々の暮らしや明治の東京、東京大空襲の模様などを学んだ。学生たちは活発に質問を發し、体験コーナーで様々な体験を楽しむなど、有意義な2時間を過ごした。翌日の教室授業時に、この江戸東京博物館で学習したこと、疑問に感じたこと、感想などを話し合い、校外活動の総括とした。
IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）	
大変勉強熱心で協調性のある学生に恵まれて、気持ちよく授業の出来るクラスだった。このクラスの特色は、週ごとに「日本の若者の価値観」「IT コミュニケーション」「グローバル化する世界」「言葉とアイデンティティー」「生命倫理」「文学作品を読む」などのテーマを決め、読解、ビデオ視聴、討論、口頭発表、作文などの活動をこのテーマに沿って行ったことである。一部全学生が十分な興味を示せなかった教材もあったが、概ね学生に知的な刺激を与え、自らの問題として考え日本語で表現するという活動に結び付けられたと思う。テーマに関する口頭発表や討論の技能は6週間で目に見えて向上した。また、作文で	

は文型・表現や漢字・語彙の授業で学習した項目を用いた文章が書けるようになり、これらの授業と読解を中心とした主たる授業との関連付けも出来たように思う。

インターネットを通じて学生各自が自主的に読んだ新聞記事その他を口頭でクラスに発表する時間も設けた(コース中各自1回ずつ)。評価の対象としなかったためか、学生により取り組み方に濃淡があったが、自主的な活動の試みとしてはよかったと考える。評価の対象とすべきだったかもしれない。

自由課題研究は、それぞれのペースと興味に応じて自由に調べレポートの形にまとめさせたが、この指導には主として午後の個別指導の時間を充てた。最後の口頭発表ではパワーポイントを用いて発表する学生も多く、上級レベルにふさわしい発表をした学生が大半だった。

コース全体の総括としては、学生にとっても教師にとっても実りのある6週間だったと言えると思う。残念だったことは、一人の学生が進学先の授業予定のために1週間早く帰国しなくてはならなかったこと、単位や成績を意識しなくてもよい学生の学習への取り組みがやや甘かったこと、およびコースの最後のほうで課題は何とか達成したものの多少気の抜けたような学生もいたことである。

C 8	
I 担当講師名	
江崎 裕子(コースヘッド)・鈴木 修子	
II 学生のうちわけ	
学生数 6名(男性 2名・女性 4名)	
国籍 日本 4名、日本／アメリカ 2名 (4名は両親が日本、1名は父が日本・母が台湾、1名は父が日本・母がアメリカ)	
III 教材(書名、扱った課の番号など)	
主教材	『Kanji in Context Vol.1』(The Japan Times) 第1回～第95回(全部)
副教材 a 教科書 b 新聞 c 本(抜粋)	『日本への招待』より「増える視線平気症候群」 『文化へのまなざし』より「フリーターと仕事」「クローンと生命」 『研究発表の方法』 日経新聞、朝日新聞記事 『ケータイを持ったサル』『バカの壁』『日本人とアイデンティティー』『千々に くだけて』『私の仕事』『大江健三郎・往復書簡』、(文学・分担読解)『蜘蛛の糸・ 杜子春』『美神』『火垂るの墓』『坊ちゃん』『ラブ・レター』『なめとこ山の熊』
視聴覚教材 a ビデオ b ラジオ c 映画 d テレビドラマ	NHK「乱れた敬語がまかり通る」「環境ホルモン汚染」「物知り一夜づけー携 帯電話」「危機に立つ広島」、民放「夏目漱石」 TBS、月尾先生の話「ユビキタス」「米と麦」「法社会」等 「シコふんじゃった」 「マリコ」
IV コースの目標	
日本語と日本文化に対する認識を深め、日本語の完成を目指す。 新聞記事、論文、エッセイ、小説を読んだり、ラジオ・テレビの番組を視聴することにより、現代の日 本社会が抱える様々な問題の一端に触れ、日本人の生活と考えるを知る。また、大学生、社会人として、日 常生活や専門分野において適切な日本語で表現活動が出来るようにする。	
V 評価の基準	
試験 2回	30%

小論文と発表	20%
漢字クイズ	10%
読解ワークシート	20%
聴解	10%
口頭表現	5%
文章表現	5%
VI 授業の構成（1週間／1課のうちわけ）	
1. 漢字 4コマ 2. 読解 4～5コマ 3. 聴解 2コマ（ビデオ 1、ラジオ 1） 4. 口頭表現 2コマ 5. 文章表現 3コマ （第三週からは小論文作成に向けた指導） 各技能は互いに密接に結びつくよう配慮したので、上記の分類は形式的なもので、実際には総合的な授業である。各週ともテーマを設けて個々の教材が知識や思考の積み重ねとなるようにした。 <u>各週のテーマ</u> 第一、二週 「若者」 第三週 「教育」 第四週 「文学」 第五週 「自然科学」 第六週 「政治と国際関係」	
VII 授業の内容	
① 聞き	ビデオは、各週のテーマに沿ったトピックの報道番組やドキュメンタリー、ラジオはインタビューを扱った。正確に言葉、表現、内容を把握すると共に現代の様々な実態を認識し、意見交換をすることを目的とした。
② 話し	敬語や丁寧な話し方の練習。ピジターの方々に4回入っていただき、場面に応じた待遇表現を練習したり、各自の小論文のテーマについて、インタビューやディスカッションの形で対話することにより小論文作成の参考とした。
③ 読み	新聞記事、論文、小説などの抜粋を読んだ。一語一語の読み・意味を正確に学び、文章の要点や全体の構成、筆者の主張を把握し、内容に対する自分の意見や感想を述べたり、文章に書いてまとめたりした。
④ 書き	書き言葉の表現、手紙、賛成意見・反対意見の書き方など。また、小論文作成に向けて、論文で用いられる表現、構成、技術を学び、最終的に約10頁の小論文を作成した。
⑤ 漢字	1. 常用漢字の中から1200字を用いた漢字語彙の読み書き、意味、使い方。 2. 読解、聴解で出てきた漢字語彙の読みと意味。 3. 四字熟語。
VIII 校外学習	
日 時	7月28日（木）
行 き 先	江戸東京博物館
活動内容	C7と合同で江戸東京博物館見学を行った。C7とC8は別々にガイドの方に常設展示室を案内していただいた。実物資料や模型を見ながら、全て日本語で江戸から東京までの歴史の話を伺った。浮世絵や焼き物に関心を持つ学生もあり、大変有意義だった。お昼は近隣のちゃんこ鍋屋で食事をしながら、C7とC8のメンバーと一緒に入り混じって話をする事が出来た。

IX 総括（良かった点、反省点、特色ある活動、今後の課題等）

昨年度のカリキュラムを踏襲しつつ、学生の実力、関心事、特徴に即して一部変更した。当初から昨年度の反省点である、無闇に難解な教材や課題を押し付けず、心身ともに余裕のある状態を保ちながら、最終日を迎えることを心がけた。6名の学生は非常に個性的で自らの主張を持っていた。また、総合力や四技能の得手、不得手にも大きな差異があり、第一、二週は如何にしてC8という学問共同体を形成していくか、教師も学生も試行錯誤した。

しかし、学生は各自の都合や遊びの誘惑と戦いながら、最後まで真剣に学問と向かい合う姿勢を忘れなかった。一日5回（課）分進む漢字には音を上げていたが、休み時間には自主的に問題を出し合って漢字の勉強をしていることも多かった。そして読解では、個性豊かな意見を述べながらも、常に互いを尊敬し合って他人の考えに注意深く耳を傾けた。第三週の文学の発表では、各自が独特のアプローチの仕方で作品を鑑賞・紹介したが、個々の鋭い感受性と深い洞察力はいずれも素晴らしかった。

第六週は、戦後60周年の8月という時期に遭遇し、読解やドラマ・ドキュメンタリーの視聴を通して過去の戦争や原爆、現在の核問題などを皆で考えた。学生は目を輝かして事実認識への意欲、積極的な発言姿勢を見せ、国際問題への関心の深さを明らかにした。

C8の最終目標である小論文は、全員が苦労したようだ。クラス内でも執筆のための技術指導や、テーマに関する知識を深めるために他者との意見交換などを行ったが、実力的に無理があったかもしれない。他項目の予習、復習にかかる時間も非常に多かったので、小論文に代わる他の課題でも良かったかと思う。

睡眠時間は毎日4～5時間だと学生たちは言っていた。このプライドをかけた頑張りや心に抱いた夢を忘れずに、次のステップに進んでもらいたい。